勧進帳
毛抜
暫
鳴神
矢の根

服部幸雄 編著

監修
郡司正勝
廣末保
服部幸雄
小池章太郎
諏訪春雄

1985 白水社

「矢の根」　尾上松緑

写真＝吉田千秋

敵役　それ。

白丁　動くな。

（ト景政にかかり、取り巻くを、大太刀抜いて一度に首を打ち落とす。ぶっ冠[一]りになり、投げ首を大分に出す）

武衡　鎌倉権五郎。

敵役皆々　景政。

景政　弱虫めら。

敵役皆々　さらば。

（ト片[二]しゃぎりになり、吉例の見得にて）

幕

（幕[四]外、景政太刀をかつぎ、きっと見得。さ[五]らしになり、よ[六]ろしく向こうへ入る。跡[七]しゃぎり）

一　大時代な荒事劇ないし荒事様式を用いた丸本歌舞伎などに用いる独特の演出手法のひとつで、首を切られたことを象徴的に見せるために黒い布を頭にかぶること。同時に小道具の「投げ首」をころがす。

二　下座音楽。儀式的な場面や、大時代な狂言の幕切れなどに用いる。原則的に太鼓と能管だけの鳴物であるが、大鼓・小鼓・大太鼓を加える場合もある。

三　いつもの、お約束の見得。見得は用語集。

四　幕を引きつけたのち、その外すなわち花道の七三で行なう演技。

五　下座音楽。太鼓・大太鼓・能管を用いる。大鼓・小鼓が加わることもある。荒事の立回りや幕切れに用いられる。

六　↓用語集

七　下座音楽。幕切れに用いるテンポの早い鳴物。ただし、一日の最後は用いない。太鼓・能管・大小鼓を用いる。

鳴神（なるかみ）

北山岩屋の場

鳴神上人　同宿大勢
白雲坊　たえま
黒雲坊

長唄連中

（本舞台一面[一]嶮岨なる岩山、正面に高さ五尺に、[三]なだれ七、八尺ばかりの掻き上げ土手。[五]三方、上に四本柱を建て、綺麗なる庵、四方に[六]注連を張り、後ろ山水。[七]橋懸り嶮岨なる岩組。[八]大滝あり。滝の上に大竹を二本立て、太縄にて注連を張る。但し、後に滝壺あり、仕掛けにて水を吹き上げ、大竹を伝うて竜大分昇る仕掛け。その外、軽き手頃の投岩大分、岩組に添うてある。[九]幕の内より[一〇]トヒヨ〳〵にて幕明くと、白雲坊、黒雲坊、坊主にて[一一]玉襷をかけ、「[一二]聞いたか〳〵」「聞いたぞ〳〵」と言いながら、本舞台先に立つ。[一三]合方止む）

一　歌舞伎の劇場で、演技を行なう主要な舞台。花道と橋がかりを除いた平舞台。
二　けわしい。
三　ななめになっている面。
四　土を掻きあげて築いた土手。ただし「書き上げ」と表記した本もあり、これによれば土手らしく見えるように書いたもの。
五　意味不詳。他本に「山三方」とあるによれば、上手・下手・後方の三方が山になっているの意か。
六　しめ縄。七五三縄とも書く。
七　舞台下手の出入口を指す。
八　岩と見えるように組んで作った道具。
九　演技の中でほうり投げるための小道具としての岩。張子で製作。
一〇　擬音。鳥の鳴き声。能管を使い、トヒヨ、トヒヨと息を切って吹いて表現する。
一一　玉は美称。襷（たすき）のこと。
一二　このせりふを言うことから「聞いたか坊主」の通称がある。
一三　↓用語集

白雲　聞いたか〳〵。
黒雲　聞いたぞ〳〵。
白雲　コレ〳〵、最前から聞いたぞ〳〵と言っているが、一体何を聞いたというのじゃ。
黒雲　本堂の後ろで鶯を聞いた。
白雲　たわけ者め。そんな事ではないわい。師の坊鳴神上人の、この度の行[一四]法の訳を聞いたかという事じゃ。
黒雲　その訳は何にも知らぬ。
白雲　それを知らぬという事があるものか。知らずは言うて聞かそう。この度師の坊鳴神上人の行法というは、[一五]戒壇お許しの願いを立てられたところ、その願いが御許しにならぬと言うて、[一六]三千世界の[一七]竜神を[一八]封じ込め、世界に雨を一滴も降らせまいという行法じゃ。それで見い、この三十日あまり、一滴の雨が降らぬは、何とき[一九]ついものではないか。
黒雲　されば、このように雨が降[二〇]らいでは、[二一]凧を上げる子どものためにはよけれども、[二二]苗代時に向こうて百姓はいかい難儀じゃ。
白雲　イヤ難儀といえば、今日はどうも気が滅入って難儀でならぬわい。
黒雲　されば、その気[二三]鬱がはっきりとなるような薬があるが、何と飲まそう

一四　天台宗や真言宗で行なう密教の行。
一五　僧侶に戒法を授ける儀式を行なうために設ける大がかりな壇。石または土で築く。
一六　世界中。三千大千世界の略。
一七　雨をつかさどると信じられた海神の名。
一八　閉じこめ。
一九　たいしたものじゃないか。ある行為が並み並みではないことを賛嘆する気持をこめて言うことば。
二〇　降らないでは。
二一　水田に稲の種籾（もみ）をまき、稲の苗を作るころ。
二二　大変な。
二三　憂うつな気分。

か。

白雲　何じゃ、よい薬がある。気のはっきりとなる薬なら、ドレ、ちと飲もう。

黒雲　飲ましょう〳〵。万病不死という薬じゃ。

白雲　サア早うくれい。

黒雲　大事の薬じゃわい。それで、しっかりと蔵へ入れて置いた。今戸前を開けて出してやろう。（ト黒雲坊股倉より貧乏樽を出し）何と〳〵たしかな蔵へ入れて置いたであろうがや。まず盃もここにあり。

（ト袖より盃を取り出す）

白雲　乞食坊主め。破戒無慚の悪僧め。かかる師の坊の行法の中に飲酒戒を破る上は、このままには差し置かれぬ。おのれ見いよ。

（ト身づくろいして行こうとする。黒雲坊立ちふさがり、止める）

黒雲　拝む〳〵。

白雲　拝むとは、おのれ。

黒雲　あやまって改むるに憚ることなかれ。大あやまりじゃ。それほどこなたが腹を立つならば、よいわ、樽を岩へ打ちつけて砕いてしまおう。如是畜生発菩提心。

一　あらゆる病気にきいて、死ぬことのない名薬という意味を薬の名前らしく言ったもの。別本に「万病円不老不死」とあり、この方がそれらしい。

二　蔵の出入口。扉のあるところ。

三　五合または一升くらいの酒を入れる小さい樽。漆（うるし）を塗らず、徳利の代りにも使った。

四　戒律を破っていながら心に恥じないこと。

五　仏教で戒める五戒の中のひとつで、酒を飲んではいけないという戒律。

六　『論語』の学而篇にある有名な文句による。

七　「如是」は仏語で、経文の中に説かれている伝記を指示することばとして、経文の最初に書かれている。

畜生に対して、お前は畜生だが仏道に帰依（きえ）する菩提心（ぼだいしん）を起こせと教えることば。ここは「こん畜生め」とのしるのを、仏語にかけて、ふざけて言ったもの。

（ト樽をぶつけようとする）

白雲　あゝら勿体なや。一粒万倍〳〵。酒はもと菩薩をもってこしらえたものじゃ。酒になった所が即ち仏。南無酒如来〳〵。あまりの勿体なさに、よいわ、一杯飲んでやろう。

黒雲　飲んでもよいかや。

白雲　そこが臨機応変というものじゃ。ソリヤ、一杯注げ。

黒雲　これはよくしたものじゃ。

（ト黒雲注ぐ。白雲坊一杯受けて飲み、頭を打って）

白雲　ハヽア極楽〳〵。サア、これをさした。

黒雲　いただこうか。（ト黒雲坊一杯うけて）明けましては、よい樽でござります。サア、こなたへ進上。

白雲　そんなら、この所によい肴があるぞ。おれが夜食にしてやろうと思うて取り寄せたが、せわしさにふやかす間がなかった。これでも嚙んで酒を飲もう。こりゃ兜頭巾という肴じゃ。

（ト干蛸を股倉より出す）

黒雲　生臭坊主め。大切な師の坊の壇上を汚すといい、破戒無慚な悪僧め。師の坊へ言わねばならぬ。師匠様〳〵。（ト呼ぶ。白雲坊せいながって止

八　一粒の種をまけば、それが繁殖（はんしょく）して一万倍もの種となる。僅かなものといっても粗末にあつかってはいけないというたとえ。

九　「菩薩」は米の異称。酒は米から作るので、こう言った。

一〇　「南無釈迦如来」をもじって言ったもの。

一一　食べてやろうと思って。

一二　水にひたしてやわらかくする。

一三　蛸（たこ）のこと。「兜頭巾」は江戸時代の火事装束のひとつ。火消しの時、馬に乗った武士がかぶった頭巾をいう。その形が蛸に似ていることから隠語として用いた。

一四　魚肉や獣肉など、いわゆるなまぐさものを平気で食べる坊主。破戒堕落した坊主。

める思い入れ）イヤ〳〵、聞かぬ〳〵。

白雲　聞かざあよい。おれも聞かぬ。師匠様、黒雲坊が酒をくらいまする。

黒雲　白雲坊が蛸をくらいまする。

（ト言うて、両方ながら口をふさぐ。この時、鈴の音がする）

二人　ヤア、師匠様〳〵。

（ト驚く。一声になる）

〽去るほどに、鳴神上人は、竜神竜女の飛行を封じ、国土の雨を閉じこむる。巌伝いの山深き壇上に、行いすましける。

（トこの内、御簾を三方巻き上げると、鳴神壇上に後向きに端座して祈念をこらしている。両僧は下の上下に侍しているうち、居眠りを始める）

〽雲井を落とす滝の糸の、岩に砕くる水音風声、清浄観の床の上、感徳応護の眦を垂れ、南無大聖不動明王〳〵。

一〇用語集
一一聞かないのなら、どうでも勝手にしろ。
一二白雲坊・黒雲坊の二人ともに。
一三下座音楽。大鼓・小鼓・能管を用いる。深山幽谷や大海などの幕明きや、主役の登場などに使う。
一四自由に飛びまわること。
一五仏道の厳しい戒律を守り、心を清くして行にはげむこと。
一六威儀を正して正座すること。
一七平舞台を指している。上下は上手寄りと下手寄り。
一八清らかでけがれのない。
一九仏が人間の祈願を聞き入れて、それに応えて慈悲をかけて下さること。「眦を垂れ給へ」とあるべきところ。「まなじり」は目。
二〇「南無」は梵語で、帰依し信仰するときに言うことば。「大聖」は格別に徳の高い人に付けて敬う語。「不動明王」は仏教に言う五大明王の一。大日如来が怒りの姿に変身して立ち現われた形であるとする。鳴神上人は不動明王に祈誓をかけていた設定ゆえに、ここに出したもの。

（トこの浄瑠璃の内、雲の絶間、着流し、扱帯、片肌ぬぎ、肩に薄衣をかけ、襟に鉦鼓を掛け、手に撞木を持ち、花道よりそろ〳〵出で、滝壺に立ち、浄瑠璃のかかりにて念仏を申す。鳴神居直って）

鳴神　一鳥啼かず、山更に幽かなり。人跡稀れなる深山の滝壺の下に念仏の声聞こゆるは、ハテ怪しやなあ、コレ一藹、コレ黒雲。白雲坊、黒雲坊、両僧。

（ト中啓にて壇上を叩く。両人肝をつぶして、ぎょっとして眼をさます）

両僧、惰弱千万な。なぜ眠る。

白雲　いえ勿体ない。私は眠りはいたしませぬ。あの坊主めが眠りましてござりまする。

黒雲　コリャ〳〵〳〵、そのような人に言い掛けをする。師匠様、私は眼を皿ほどにして見張っておりました。一藹が眠りました。

白雲　嘘をつく坊主め。どこにおれが眠った。おのれが眠った。

黒雲　おぬしが眠った。

白雲　おぬしとは。

黒雲　おのれとは。

一一扱帯　一幅の布を適当な長さに切り、しごいて帯にしたもの。単に「しごき」ともいう。
一二とっかかり。はじめ。
一三鳥の鳴声ひとつだに聞こえず、山はひっそりと静まり返っている。
一四人の往来もほとんど無い。
一五「一法藹」の略語で、年功を積んで長老となった僧侶のこと。
一六扇の一種。親骨の上端が外側に反らせてあり、たたんでも半開きの形になっているもの。
一七なまけるのがはなはだしいこと。
一八言いがかりをつける。罪をなすりつける。

（ト両方腕まくりして意気ごむ）

鳴神　こりゃ、どうじゃ。（ト両人静まる）それが沙門[一]の行跡か。よい、眠らぬが定[二]ならば、今[四]のを聞いたか。

両人　えゝ。

鳴神　イヤサ、今のを聞いたかよ。

両人　何でござる。

鳴神　なんと奇怪な事じゃ。鳥も通わぬこの山奥、それに遥か滝壺のほとりに聞こえて、さも恨めしき声に念仏を申す。

両人　えゝ。

（ト怖がる思い入れ）

鳴神　ハテ心得ぬ事じゃ。こりゃ、やい、妖怪の類いか、但し幽霊か。

両人　えゝ。

（ト怖がる思い入れ）

鳴神　両僧、滝壺のほとりへ行って見届けて来い。

両人　えゝ。

（ト大きに肝をつぶす）

鳴神　行かぬか。

一　梵語で、僧のこと。出家して道を修する人の称。
二　ふるまい。おこない。
三　本当なら。
四　今の声を聞いたか。念仏の声を聞いたかということ。
五　相手が言おうとするのを押さえて、強く自分の意志を主張する時に用いる感動詞。
六　口用語集
七　理解のできないことだ。
八　あるいは。

両人　あい。

（トふるえる）

鳴神　行かぬか。

両人　あい。（ト思い入れ。ふるえて）かしこまりました。

白雲　黒雲坊、師の坊の御意じゃ。見て来い。

黒雲　こなた見てござれ。こなた一臈じゃないか。

白雲　それが何とした。

黒雲　雑煮[九]に座る時に、何とそなたが先へ座るか、おれが先へ座るか。

白雲　そりゃおれが先へ座るさ。

黒雲　サ、それじゃによって、そなた先へ見て来やれと言うが、何と悪いか。

白雲　こりゃ、雑煮と幽霊と一つ口に言われるものか。何でも一臈が言うに従わぬか。言う事を聞かぬとくらわせるぞよ。

黒雲　くらわして見い。

（ト両人腕まくりをして張り合おうとして、その手を見つけられ）

鳴神　こりゃ何じゃ。

黒雲　ハイ、このようなつくね芋[一〇]がござりますなら、お斎[一一]の菜にいたそうと存じまする。

九　なぐるぞ。
一〇　なぐりあおうとして。
一一　「つくいも」とも。やまのいもに似た形のいもで、すってとろろを作る。仏掌薯と表記するように、にぎりこぶしのような形をしている。そこで、振り上げた手をこれにたとえたユーモラスなせりふ。
一二　僧家の食事のこと。とくに午前の食事を斎という。「菜」はおかず。

白雲　このような蕪[一]が見えましたら、汁にいたして差し上げようと存じまして。

鳴神　大だわけめ。

両人　はい。

（ト両人静まる）

鳴神　争いを止めて、両僧とも行って見て来い。

両人　かしこまりました。

（ト両人おずく[二]差し足して滝壺へ行き、絶間を見て肝をつぶし、本舞台へ来て）

白雲　あゝ、見事なものじゃ。

黒雲　きょうといく[三]。

白雲　無類飛び切[四]りじゃ。まずあれは何であろう。どうもただの女じゃない。人間ではあるまいぞ。

黒雲　まず天人じゃ。師の坊の行力[五]で世界に水がないによって、羽衣をここへ洗濯に来たものじゃ。

白雲　いやく、目違いく。あれは竜女じゃ。師の坊の行力で雨が降らず、海も川も池も皆干上がり切っているによって、竜女の居所がない。まさしく竜宮で店[六]を追われたものが、この滝へ封じ込められた竜神の一門一家に逢いに来たものじゃ。

一　これも、振り上げた手を蕪（かぶ）に見立ててごまかそうとするおかしみのせりふ。

二　音を立てないように、つまさき立ててそっと歩くこと。ぬき足も同じ。

三　おったまげた。あんまりすばらしくて物も言えぬほど驚いた気持ちを表すことば。

四　程度のはなはだしいさま。最上。極上。

五　行法の力。

黒雲　あゝ、文盲[七]な坊主じゃな。竜女というものは頭の上にきまってさざえか生貝[八]か海老が付いてあるはずじゃが、海老[九]は大師匠に差し合いじゃによって竜女じゃない。あの美しいところは天人に極[十]まった。

白雲　ハテ、竜女じゃよ。

黒雲　イヤ、天人じゃよ。

白雲　またこいつ口答えする。くらわすぞよ。

黒雲　なぐって[十一]こますぞ。

（ト互いになぐろうとする。また見つけらるる）

鳴神　コレ、何じゃ。

白雲　急々如律令[十二]。

鳴神　大だわけめが。結跏趺坐[十三]して黙しておろう。

両人　ハイ。

（トかしこまる）

鳴神　よい。おれが見届けよう。

（ト滝壺の方を見やり）

六　「たな」は町家のいう「あきないみせ」のこと。観客に身近かな表現を使った遊び。

七　文字の読めない人。ここは転じて、何にも知らない坊主の意に使う。

八　なまの貝。

九　初演の時に鳴神上人の役をつとめたのが市川海老蔵（前名三代目団十郎）だったことから、その当てこみで、師匠の名前だからさしさわりがあると言ったもの。楽屋落ちの一種。この種のせりふは変更したり、省略したりすることもある。

十　なぐってやるぞ。「こます」はある動作をしようとする意志を表わす補助動詞。

十一　わざわいを避ける時に唱える呪文。元来は中国の漢代の公文書に、本文の後に書き添えた定まり文句。転じて、陰陽師や祈禱僧が除魔、避邪のために唱えるまじないのことばになった。

十二　仏語。大日如来の坐り方の名称。右足を左足の股（もも）の上、左足を右股の上に組んでのせ、足の裏を見せる形の坐り方。

コレ〳〵。

（ト呼ぶ。三度目に）

絶間　えゝ。

鳴神　はて心得ぬ。飛禽猛獣だに通い難き山路を経て、[二]さもやんごとなき女性の身の、[三]峨々と聳えたる巌の前に立ったるは、アラ[四]いぶかしや。まずそなたは何者じゃ。

絶間　わしかえ。

両人　わしかえ。

（ト真似る）

鳴神　黙ろう。

両人　はい。

鳴神　成程そなたの事じゃ。

絶間　あい。みずからは、はるかこの御山の麓の者。夫に別れました女でござりまする。

鳴神　夫に別れたか。

絶間　あい。

（ト泣く）

一　自山に飛びまわり走りまわることのできる鳥や猛獣でさえ往来のむづかしい。
二　極めて高貴な。
三　山が高くけわしい形容。
四　不審なことだ。怪しい。
五　黙りおろう。黙っておれ。

鳴神　ふう、生き別れか、死に別れか。

絶間　しかも、きょうがちょうど[六]七々日。

鳴神　四十九日か。

絶間　あい。

鳴神　南無阿弥陀仏。

絶間　[七]筐こそ今は仇なれこれなくば、忘るることもあらましものを。[八]あらあらしきこの薄衣、浮世の垢をすすがんと存じますれば、いかなる事にや、百日あまり日照りして、井の水とても涸き果て、一滴の水もござりませぬ。承れば、この御山の滝の瀬は、かかる日照りにも水絶えず、清く流るる名水じゃと申すによって、女子の身の踏みなれぬ山路を登り参りました。[九]ゆかしきは夫、なつかしきが良人、自らが心の中を御推量なされて下されませいなあ。

（ト泣く）

鳴神　さて〳〵哀れな物語り、見れば若い身空で、嶮岨をいとわず、夫の筐を洗濯せんとよじ登ったる志は、ハテ[一〇]感涙至極じゃなあ。それほどの語らいならば、添いつれた頃は、いかい仲がよかったと見える。

絶間　仲のよい段かいなあ。[一一]天にあらば比翼の鳥、地にあらば連理の枝と言

六　仏語で四十九日のこと。人の死後、仏教では七日ごとに法要を行なうが、七度目の四十九日にあたる日の法事をいう。この日を過ぎると死者は来世に生まれたと信じた。その最後の日の法事。
七　筐は形見。『古今集』恋四所収の読人知らずの歌。亡くなった夫のこの形見があるのが今はかえって恨めしく思われる。これさえなければ、忘れることもできましょうものを。
八　はなはだ粗末な。
九　慕わしい。
一〇　この上なく感動して流す涙。
一一　仲が良いなどという程度ではない。もっともっと親密だった、と強調する言い方。
三　夫婦の契りが格別に深いことのたとえ。白居易の詩『長恨歌』に、玄宗皇帝と楊貴妃との契りが深かったことを述べるところにある文句による。比翼の鳥は雌雄の二鳥がそれぞれ一目一翼で、いつも一体になって空を飛んだという伝説がある。連理の枝は一つの木の枝が他の木の枝と連なって木目が通じていること。

い交わしたる来し方を思い出せば、おもしろい事でござりました。

鳴神　煩悩即菩提、婦人に対してかく詞を交わすも因縁、後生の回向、その話が聞きたいものじゃ。

絶間　お話し申して、心の憂さを晴らしとうござります。何と、お話し申しましょうかえ。

鳴神　そりゃよかろう。サ、話しゃ〳〵。

絶間　サア、お話し申しまするが、そことここととは遥か隔たっておりまする。低うお話し申したらお耳には入るまいし、高う申したら山彦に答えて凄まじゅうござりましょう。どうぞお側へ寄って、近うお話し申したいものでござりまするが、お側へは行かれず。

鳴神　ちっとも大事ない。其所で話しては滝の音に紛れて、なかなか耳へは入らぬ。ここへおじゃ〳〵。

絶間　あの、往ても大事ないかえ。

鳴神　だんないとも〳〵。ここへ〳〵。

絶間　そんならお側へ参りましょう。

（卜滝壺を離れて、本舞台へずか〳〵と来る）

白雲　コリャ〳〵ならぬ。師匠様の仰せ渡されで、女人禁制。

一　凡人の眼から見る時は、迷いの主体である煩悩と悟道の主体である菩提とは全然別のものであるけれども、悟りを開いた眼から見る時は、それらはそのまま一つであって差別がないという意。「煩悩」は情欲・願望などの心の迷い。「菩提」は仏道の悟り。

二　「後生」は来世のこと。後生が安楽であるように導くたむけとして。

三　さしつかえない。かまわない。

四　かまわない。「大事ない」に同じ。

五　仏教で、女性を近づけないことをいう。

黒雲　誓文ならぬ。

絶間　あれあのように言うてでござんすわいなあ。

鳴神　あれあのように言うはずじゃ。壇上近く女を寄せることは叶わぬ。そこで、両僧が膝元近く寄って、それで話せ〳〵。

絶間　あい〳〵。そんならここでお話し申しましょう。お二人様も聞いて下さんせ。

鳴神　さらば聞こうか。

二人　話した〳〵。

絶間　恥かしながら、その殿御に馴れましたはな、遠い事でもござんせぬ。去年の春の弥生半ば、清水へ花見に往たと思わしゃんせ。見渡せば柳桜をこき交ぜて、都ぞ春の錦というは、あの音羽山の事でござんす。幔幕を打ち回して、ここでは琴の爪音、かしこでは三味線の鼓のと、唄うやら舞うやら、イヤもうたまった事ではござんせぬ。するとな、幕の外に、年の頃は二十余りの殿御、すんなりと立って、わしが幕の内を覗いていやしゃんした。その気高さ、目付きなら口元なら、イヤもうどうもこうも言われた事じゃないわいの。とんとわしが方からいとしゅうなったと思わしゃんせ。

白雲　あの近付きでもないのに。

六　神に誓って。決して。

七　馴れそめたのは、の意。親しくなったきっかけは。

八　それほど以前のことではございません。

九　陰暦三月中旬。

一〇　京都市東山区にある清水寺。山号を音羽山という。西国三十三所の第十六番札所。

一一　『古今集』巻第一、素性法師の歌「見わたせば柳桜をこきまぜて都ぞ春の錦なりける」による。

一二　清水寺のある山。また清水寺の山号でもある。

一三　あまりの賑やかさ、浮き浮きする楽しさというものは、とてもたまったものではありません。

一四　目つきのやさしさといい、口もとの美しさといい。

一五　恋慕する感情を抱いたと。

一六　面識のある人。

絶間　さいなあ、その可愛らしさというものは、ほんにちり毛元から。

黒雲　ぞっとしたか。

絶間　ぞっとの段かいな。

黒雲　がたくの震えたか。

絶間　がたくの段かいな。寒うなったり、熱うなったり。

白雲　おもしろい。

黒雲　たまらぬわ。

絶間　したれば、先きの殿御もいたずらな、あっちからもわしが顔をじっと見ぬようでいやしゃんした。

白雲　うまいなく。

黒雲　水飴で餅食うようであったか。

絶間　時に、かの殿御が懐から短冊を出して、矢立ての筆に墨を含ませ、一首の歌をさらくと書いて、わしが腰元を招いて、送らしゃんした。その手の美しさというものは。

両人　能書かく。

絶間　能書ともく。しかも行成ように書かしゃんしたわいな。

白雲　とって置けく。

一　首すじの下、両肩の中央のところ。灸でいう「ぼんのくぼ」のあたり。

二　ぞっとしたなどというような、そんな程度のことではない。

三　別本によると、ここのせりふは「じっと見るようで見ぬようで見るようで」となっている。「見るようで」を補ったほうが通りがよい。

四　水飴をつけて餅を食うようにうまいと言って、前のせりふの「うまいなく」に合わせたユーモア。別の台本では「氷砂糖で餅食うようなものじゃ」とある。

五　携帯用の墨と筆を入れたもの。

六　筆跡。

七　上手な筆跡。

八　行成ぶり。行成は平安時代の能書家として著名な藤原行成。草仮名の大成者で、三蹟（さんせき）の一人。

黒雲　シテその歌は。

絶間　見ずもあらず、見もせぬ人の恋しくは。

白雲　見ずもあらず。

黒雲　見もせぬ人の恋しくは。

絶間　あゝ、何とやらいう下の句でござんした。

白雲　それを忘れるということがあるものか。

黒雲　板に書き付けて、帯へ括り付けていたがよい。

絶間　見ずもあらず、見もせぬ人の恋しくは。

鳴神　あやなく今日や眺め暮らさん、という下の句ではなかったかの。

絶間　ほんにそうでござんしたわいの。

鳴神　シテくどうじゃ。

絶間　とんとそれからおもしろうなったと思わしゃんせ。

両人　そのはずく。

絶間　そこでわしが局を呼んで、あなたのお名を聞いておじゃ、いずく如何なる所にお住まいなさるるお方じゃ、委しゅう聞いておじゃ、と言い付けて局をやったれば。

両人　言うたかく。

九　『古今集』恋一にある在原業平の歌。見ないとは言えず、たしかに見たのでもない女のことが心にかかり、このように恋しく思われるからは、今日もひとすじに慕って物思いにふけって暮らすことだろうか、という意味の歌。

一〇　私の局。「局」は部屋を持っている女官。侍女。

一一　あのお方。

絶間　イエ〳〵、言わしゃんせぬわいなあ。その憎さが、人に物を思わせて、やつがれは名も無き者にて、住居は嵯峨野の奥の片ほとり、結びて建てる草の庵とばかり言うて往なしゃんしたわいなあ。

黒雲　残念千万。

絶間　イヤもう残り多いやら、気がもめるやら。やれ止めまして、と言うう[三]ちに、入相の鐘に花ぞ散り〳〵に群集も去ぬると思わしゃんせ。そうすると、乳母や腰元が、サアお前もお帰りなされませ、と言うて、無理やりに乗物に乗せられて、その日は内へ戻った。

両人　南無妙法蓮華経。

絶間　したが、普門品の功徳というものは、きついものでござんす。まず観音さまへ願をかけたればな、あらたかな夢のお告げ。

両人　奇妙〳〵。

絶間　その有難さ嬉しさというものは、イヤもう詞に述べられたものじゃござんせぬ。その夜皆を寝させておいて、わしたった一人、嵯峨野の奥まで往たわいなあ。

両人　きついわ〳〵。

絶間　昼さえ道を知らぬ野の末、山を上ったり下ったり、とうとう嵯峨野へ

一　私。一人称の謙称。
二　京都市右京区嵯峨付近一帯の称。古来高貴な人の別荘があり、名所旧蹟も多い。恋人の隠れ家などにふさわしい場所と考えられていた。
三　お止め申して下さい。
四　『新古今集』巻二、能因法師の歌「山里の春の夕ぐれ来て見れば入相の鐘に花ぞ散りける」を踏まえて言う。「入相」は日の暮れるころ。
五　うまくいかなくって残念だったという女の気持を受けて、僧侶らしく経文で応じたユーモア。「残念なことをしたな〳〵」という受け答え。「南無三宝」に近い。
六　法華経、第八巻、観世音菩薩普門品のこと。観世音菩薩の名を受持することの功徳、この菩薩が三十三に変身して世の中の人々を救いたまうことの有難さを説く。
七　えらいわ、えらいわ。女性の男を恋うる力の強さを賛嘆しつつ、ひやかす口吻がある。

行ったればな、大きな川があって。

白雲　あるともく。大堰川、桂川。

黒雲　名代の川じゃ。

絶間　サア、その川を渡ろうと思えば、船はなし、橋はなし。さらばと肝を据えて、昼ならばよいものかいの。闇を便りの川渡り。女子の身の大胆な、裾をぐっとからげてな。

両人　からげたかく。

絶間　からげた段かいな。

両人　おゝつめた。

絶間　向こうの方へぞんぶり。

白雲　ぞんぶり。

絶間　ぞんぶり。

黒雲　ぞんぶり。

絶間　ぞんぶり。

両人　ぞんぶりく。

絶間　ぞんぶりく。

白雲　ほゝう、深いわく。

八　京都市西南部の川で、保津川の上流をいう。嵐山の渡月橋を境として、その上流が大井川であり、下流が桂川になる。
九　有名な。名高い。
一〇　度胸を定めて。
一一　昼だったらそんなことをしてよいものか。とてもそんなことはできないという気持を託す。
一二　暗闇を幸いとしての川渡り。
一三　ざんぶり。水の中に足を入れて歩く音の形容。

黒雲　これは丈がたらぬわ。

（トこの内三人して川を渡るおかし味）

絶間　人の精力というものは恐ろしいもの、とう〳〵向こうの岸へ渡り着いたわいの。

両人　えゝ、絞れ〳〵。

（ト両人着物を絞る思い入れ）

絶間　濡れぬ先こそ露をもいとえ。小笹かき分け、荻踏みしだき、足に任せて行く程に、殿御の庵に着いたわいなあ。

両人　着いたか〳〵。

絶間　その家の様のつきづきしさ、柴折戸を押し開けてずっと入るとな、かの殿御が、やれおじゃったかと言うて、わしが手を取ってすぐに内へ入って、何かつもる物語り、香を聞くやら酒を飲むやら、嬉しさのあまり戯れが過ぎて、つい口舌になったわいなあ。

白雲　喉元過ぎれば熱さを忘るるじゃの。

絶間　えゝ、つんとおかしゃんせ、おくまいが何とした。つめるぞえ、叩くぞえ、叩いてみや、叩かいでは、と殿御の頭をぴっしゃりと。

（ト黒雲坊の頭を叩く。痛いという思い入れ）

一 身のたけ。背の高さ。
二 精神力。ここでは愛する男のもとへ行き着きたいという女の一心の念い。
三 ロ用語集
四 諺（ことわざ）を使う。雨露に濡れない前には（色恋を知らない以前には）、露ほども濡れるのがいやだったのに。いったん濡れてしまった（色恋を知ってしまった）からには、もうどうにでもなれ、の気持を含む。
五 笹。「小」は接頭語。
六 似合わしさ。『徒然草』（十段）の「家居のつきづきしくあらまほしきこそ、仮の宿りとは思へど興あるものなれ」を踏まえたせりふ。
七 お出でになったか。
八 香を楽しむことを「聞く」という。
九 男女の間のいさかい。恋する男女の口あらそい。
一〇 諺による。どんな熱い物も咽喉を通してしまえば忘れてしまう。ここは、あれほど見たい逢いたいと恋いこがれていたのに、いったん逢ってしまえば、その気持ちを忘れてしまうことをたとえて言う。

両人　勘忍せい〳〵。

絶間　その言い昇りが嵩じてな、おもしろうない程に、つっと立って去のうとしたれば、そりゃあまりむごいぞやと言うて、きっと止めさしゃんしたわいの。

鳴神　シテ〳〵どうじゃ。

絶間　なんと、そう言うて止めしゃんしても、去のうというては去なにゃ置かぬと、はずして行こうとしたれば、袂をとって、イヤやることはならぬと引かしゃんす。イヤ去ぬる、やらぬ、と控うる袂振り切って、ついとして。

（トこの内鳴神壇上よりすべり落ち、気を失う）

白雲　やあ、こりゃ師匠様が目を回さっしゃれた。

（ト三人うろたえ）

両人　師匠様〳〵。

絶間　上人様〳〵。

（ト三人にて声々に呼び生ける。この内、絶間姫滝水を手にすくうて飲ませる。両僧手足を撫でる）

白雲　ヤア、こりゃ総身が。

一 言いあらそいの程度がはなはだしくなって。
二 言ったからには。
三 つうっと。すうっと。

黒雲　冷とうなったわ。

両人　お師匠様〳〵。

（ト驚く。絶間、鳴神の胸を開け、押しながら呼び生ける。鳴神ウムと気のつきし思い入れ）

白雲　嬉しや〳〵。

両人　お気がついたわ。

絶間　上人様、お心がつきましたか。

鳴神　両僧。

両人　はい。

絶間　お心がつきましたか。

鳴神　さて〳〵、沙門[一]のあるまいこと。婦人の噺[二]に聞き惚れて、思わず壇上よりまろび落ちて、いこう胸を打ったが、今性根を取り失のうた中に、一滴の冷水口中に入ると思うと、気もさわやかになった。

絶間　あい、そのはずでござんす。あの滝の水を、わたしが手[三]であげたのでござんすわいなあ。

鳴神　うむ、そんなら冷水を飲ませたはそなたか。

絶間　あい。

一　僧侶の身として、あってはならないこと。

二　意識を失っている間に。

三　別本に「口にくくんで、口うつしにあげたのでござりまする」とあり、現行台本もそれに従っている。

鳴神　また胸を押してくれたもそなた。

絶間　あい。

鳴神　むゝ。

（ト絶間の顔をじっと見て、暫く思い入れあって、絶間の胸ぐらをとって投げる）

絶間　あれ。

鳴神　両僧、油断すな。

絶間　こりゃ何となされまするぞ。

鳴神　あらいぶかしや。昔天竺[四]破羅那国に一道士あり。額に角を生ず。名づけて一角仙人という。ある時雨後の事なるに、雨の滴り乾くことなく、山谷一面に滑らかなり。雲に乗り、水を歩む仙人なれども、暫時の怠慢に仙術を忘れ、誤って遥かの谷へまろび落ちたり。一角大いに怒り、これ元雨のためなれど、雨は無心にして科なし。雨を降らせしは竜神なり。よし、天地の間の竜神竜女を仙術をもって封じ込め、国土に雨を降らせじと、怒れる眼車輪のごとく、遂に大千世界の竜神竜女をことごとく一巌窟に封じ込め、一本の締めを張り、封を書きて仙術毫釐も怠らず。ここにおいて天下大いに旱魃して田畑焦れて民の煩いとなる。時の帝これを歎かせたまい、

四　天竺は印度の古称。破羅那国は恒河の流域にあった国名。これ以下の一角仙人説話は、『太平記』および謡曲『一角仙人』にもとづく。

五　山も谷も一帯に雨水のためにしめって、滑らかになっている。

六　うっかりしたこと。

七　怒怒の形相を形容するときの常套句。

八　大千三千世界。世界中。

九　「符」か。護符。

一〇　ちり毛のこと。ごく僅かなこと（もの）のたとえ。

一一　日でりがつづいて。

一二　日に焼けて。

かかる仙術を破らんには妍き女にしかずと、旋陀女という美人に勅して、汝一角が仙窟に到り、色をもて通力を失わせよ、しからば忽ち雨降るべし、との勅諚にしたがい、施陀女はくだんの山に分け入り、色をもって一角の魂をとらかし、通力を破って帝都に帰れば、直ちに黒雲天にむらがり、大雨車軸を流し、草木五穀うるおいを生ずる。察するところ、おのれめは破羅那国一角仙人のためしを引き、我が通力を破らんとてここへ来れる女と見ゆる。サア、大内にていかなる公卿の息女なるか、又は武臣の姫なりや。正直正路の白状に及ばずんば、立ち所に引き裂き捨つるが、女、返答は、どゞどうじゃ。

絶間　あゝ勿体なや。上人様、ゆめ〳〵左様なものではござりませぬ。さっきにから申し上げまするとおり、夫の筐を洗わんために、この滝壺までよじ登りました女子でござんす。それに思いもよらぬお疑いをうけて、かえって亡き人の菩提の妨げ。幸いかなや、この滝壺へ身を投げて、冥途の夫に逢いましょう。御回向頼み上げまする。皆様、さらば。南無阿弥陀仏。

（ト絶間、滝壺へ身を投げようと走り行く）

鳴神　ヤレ、止めい〳〵（ト思い入れ）。

（ト両僧あわてて抱き止め、鳴神の前へ連れて来る）

一 顔の美しい女性にまさるものはない。
二 「旋陀夫人」あるいは「旃陀女」とも。印度の伝説の中の美女。
三 仙人の住む岩屋。
四 容色。情事。
五 神通力。超人的な力。
六 例の。問題の。
七 「蕩かす」。誘惑して本心を失わせる。心をやわらげて、とろけるようなうっとりとした気分にさせる。
八 大雨が盛んに降る形容。
九 例にならって。
一〇 宮中。
一一 すなおで、偽りのない。
一二 まったくもって。
一三 極楽往生すること。
一四 ❹用語集

ハテ、気の短い。いったん咎めたればこそ、そなたの本性が顔色に現われた。殊勝〳〵。そんなら無益に死ぬるに及ばぬ。死んで菩提のためにはならぬぞや。

絶間　でも、生きていて。

鳴神　尼になりゃ。比丘尼になりゃ。

絶間　えゝ。

鳴神　鳴神が剃刀を当てて、御仏の弟子にしよう。

絶間　あのお前のお弟子になされて下さりましょうかえ。

鳴神　おいのう。

絶間　あの、ほんにかえ。

鳴神　鳴神に妄語両舌があろうかい。

絶間　えゝ、有難うござりまする。

白雲　これで落ちついたわ。

黒雲　おらもほくろびでも縫うてもらうには、マアよいか。

鳴神　両僧、そち達の中一人、麓へ下がって剃刀と剃髪の具をととのえて持って来い。

白雲　黒雲坊、師の仰せ付けられじゃ。

一五 梵語。尼僧。男の比丘（びく）に対していう語。
一六 いい加減なことばや二枚舌。
一七 布地の糸のほころび。
一八 現行の台本では、ここで「そち達両人」と呼びかけ、同時に二人を行かせることに改めている。

黒雲　そなたが行けと言って、めったにおれが行こうか。しゃらくさい。

鳴神　えゝ、おれが差図して、一腐が言い付けるのに、おのれ行くまいか。

黒雲　参りまする。

白雲　早う失せぬか。

黒雲　参ります、参りますが、もう日が暮れになった。あの峡曲りの榎の下が、えゝ気味の悪い所じゃ。

（ト言いながら、渋々花道へ行く中にて、化け物を見付ける思い入れして怖がり）

何か赤い物が目にさえぎるが、何じゃ知らぬ。待てよ、はゝあ、向こうの桟敷の毛氈じゃ。毛せん蓮華経、観世音ぼうさ。

（ト言いながら入る）

鳴神　臆病な坊主じゃ。

白雲　出家が物に怖れてなるものでござりますか。わしはつんと悟道いたしておりまする。

鳴神　コリャどうでも、一腐ほどある。殊勝く。や、これはいかなこと。一度に言い付けてやればよかったものを。

白雲　何でござりまする。

一　山と山とのはざまの曲り道。
二　歌舞伎の劇場にある高級の観劇施設。桟敷の客は芝居茶屋を通して席を予約した。当日、茶屋は桟敷の前の欄に緋の毛氈をかけた。観客への御愛敬で、こういった。
三　「南無妙法蓮華経」「観世音菩薩」と唱えるのを、ふざけて言ったもの。
四　仏道の真理を悟ること。
五　感心々々。

鳴神　ハテ、尼にすれば直ぐに袈裟衣を着せねばならぬ。殊に宗門の数珠を持たせねばならぬ。一腐、大儀ながらそなた今から麓へ下がって持って来い。

白雲　えっ（ト思い入れ）。

（ト大いに肝をつぶす）

お師匠様、またさっきより日が暮れて参りましたに、よいかげんなことをおっしゃりませい。

鳴神　悟道めされた一腐には似合わぬ言い分な。

白雲　でもお前、とっぷりと暮れて参りました。

鳴神　日が暮りょうが、夜が更きょうが、師の命に背くか。行こうと言わば、早う失しょうて。

白雲　失せまする。失せは失せまするが、そんならお前も、あの坊主と一緒におやりなされたがようござりまするわいの。

（ト花道へ出て、空を見たり、脇を見たり、怖がりながら思い入れあり）

鳴神　まだ失せぬか。

白雲　サ、参りは参りますが、あの女中と師匠様とたった二人。

七　びっくり仰天する。
八　行けと言ったら、早く行けと言うに。
九　ロ用語集

鳴神　何じゃ。

白雲　大黒〳〵福大黒を見さいな。

（ト入る）

絶間　モシ、お師匠様〳〵。

鳴神　あゝ、よいぞ。もう師匠様と言うか。成程そう詞を改めたがよい。お
　れは師匠なり、そなたは弟子、おっつけ受戒じゃ程に、心を清く持ちまし
　ょう。

絶間　そんなら、アノ、剃刀が来ると、この髪を剃りますかえ。

鳴神　くるく坊主にするわえ（ト思い入れ）。

（ト絶間泣く）

　こりゃ、泣くか。なぜ泣くぞ。

絶間　一筋を千筋と撫でし黒髪を、今剃って捨つると思えば。

鳴神　それで悲しゅうて泣くか。

絶間　あい（ト思い入れ）。アイタ、、、、。

（トつかえを起こす思い入れあり）

鳴神　何としたく。

絶間　あい、思い切ってはおりまするが、あゝ悲しいことじゃと思いまして、

一　大黒は僧侶の妻の俗称。福大黒は福を招き寄せる大黒天の意味。「福大黒を見さいな」は大黒舞の囃しことばを一ひねりしたもの。うたいながら滑稽な所作を見せる。
　現行の台本では、このあと両僧の退場の場面は次のようになっている。
鳴神　いや、こいつらは。
白雲　なんぼ叱らさっしゃりましても、お師匠様のあのどん亀で。
黒雲　あの女中をくんぐるべいとは。
白雲　お師匠様の。
両人　ずぼんぼえ。
（ト両人下座の唄にて花道へ入る）
二　もうすぐに。
三　仏門に入った者が戒を受けること。その儀礼をいう。
四　一筋の髪の毛も大切に思って撫でていた。
五　癩（しゃく）などで胸がふさがって苦しいこと。

　つかえが、あゝいたく。

鳴神　ハテ、気の毒な。薬はなし。ドレ、おれが背中をもんでやろう。

絶間　いえ、勿体ない。何の。

鳴神　ハテ、病のことじゃ。何の遠慮があろう。ドレく（ト思い入れ）。

（ト胸をさすり）

　よいかく。

絶間　いこう快うござりまする。

鳴神　あじなものが手にさわった。こりゃ何じゃ。

絶間　アレ、何となされまする。

鳴神　ハヽア、乳か。嬰児の時に有難くも母の乳味で育って、今一寺の住職
　となったも、これ全く母人の乳の恩、その乳を忘るるようになったも、な
　んと出家というものは木の端のようなものじゃ。

絶間　御殊勝なことでござりまする。

鳴神　ドレく、もう一度さすってやろう。

（ト言う時、鳴神ちょっと手を離して、絶間の片手を押さえる。絶間
　思い入れあって振り切り）

絶間　師匠様、鳴神様、コリャお前は。

六　おもしろいもの。妙なもの。
七　赤児。みどり子。
八　人情を解せぬ者のたとえ。『徒然草』第一段に「法師ばかり羨しからぬものはあらじ。人には木の端のやうに思はるるよと、清少納言が書けるも、げにさることぞかし」によったもの。
九　現行台本ではこのせりふ以下ト書までの間が次のようになっている。
鳴神　ドレドレお脈をとってみよう。これが乳で、その下が鳩尾、かの病いの凝っている所じゃ。おゝ、さっきよりよっぽどくつろいだわえ。ナント、よい気味か。
絶間　お師匠様。
鳴神　拝む。拝む。上品（じょうぼん）の台（うてな）に望みはない。下品下生の下へ救いとらせ給え。

鳴神　気が違うたということか。
絶間　本性じゃござりますまい。
鳴神　破戒したということか。
絶間　破戒の段ではないわいの。御出家の身として。
鳴神　おう、生きながら地獄へ落ちてもだんない。
絶間　イヤサ上人様。
鳴神　仏も元は捨てし世の悉達太子、この世には妻もあり子もあった。近くは志賀寺の上人のためしもあり。応と言え。従わぬにおいては、我立ち所に一念の悪鬼となって、その美しい咽喉笛へ噛みついて、共に奈落へ連れ行くが、女、返答は、ナヽ何と。
絶間　モシ、上人様。
鳴神　ならぬか。
絶間　お前は。
鳴神　ならぬか。
絶間　なるわいなあ。
鳴神　ヤア。
絶間　何じゃ、怖い顔して、そのような恋路があるものかいなあ。

一　苦しくない。さしつかえない。
二　仏ももとは凡俗と交わる世で。
三　釈迦如来の世俗時代の名。
四　崇福寺のこと。旧址は滋賀県大津市の北方。志賀寺の朝寛（朝観）上人が京極の御息所に恋慕し、死を覚悟して御息所の御所を訪ね、庭に一昼夜立ちつくしていた。あわれに思った御息所がことばをかけると、上人は無言でさめざめと泣き、御簾からさし出した御息所の手に取りついて、艶歌を詠みかけたという故事。『太平記』（巻三十七）に出ている説話による。
五　梵語。地獄のこと。

鳴神　サアく、どうじゃ。
絶間　応じゃわいなあ。
鳴神　応じゃ。
絶間　応じゃ。
鳴神　往生極楽く。サアく、早く。
絶間　あれ、待たしゃんせ。応は応じゃが、そんならお前は、ほんにわしと女夫になる気かえ。
鳴神　女夫が池へまっさかさまに落つる法もあれ。
絶間　サ、待たしゃんせいの。女夫になるはなりましょうが、わしは坊さんを良人に持つはいや。
鳴神　坊主は脚気の薬じゃがな。
絶間　何を、そんなら還俗さんすか。
鳴神　只今でも。
絶間　男にならんすの。
鳴神　今ように髪結うて見せる。
絶間　ほんにかえ。
鳴神　仏祖をかけて。

六　血の池地獄へおちるというのをもじって、女夫が池といったシャレ。
七　未詳。「すねの毛のない者は脚気にかからない」という伝承を頭髪にすりかえて言ったことば遊びかと思われる。
八　僧侶をやめて、俗人に戻ること。
九　当世風に。
一〇「仏祖」は釈迦牟尼。「神にかけて」と同じで、「誓って」の意。

絶間　アレ、その誓文が抹香臭い。それに、殿御の名に鳴神上人とは。

鳴神　名を変えるがや。

絶間　何とえ。

鳴神　市川左団次。

絶間　よい女夫になりました。

鳴神　エヽ忝い。

絶間　そこで盃事をしたいものじゃ。

鳴神　盃しょう〳〵。酒もある。

絶間　えゝ。

鳴神　盃もある（ト思い入れ）。

（ト壇の脇より樽と大盃を出す）

あの弟子坊主めらが、大ていの粋ではないか。おれが目を抜きおったを、ちらりと見ておいて、禍も三年酒、五年酒の御念を入れられて、隠して置きおったを、今用に立てるじゃて。

絶間　それは幸い。サア、お前始めさんせ。

鳴神　いや、俗家で聞いたことがある。夫婦の盃は女子の方から飲んで、夫へさすものじゃと言うぞや。

一「抹香」はしきみの葉や皮を粉にして作った香。「抹香くさい」は坊主くさい。

二　この台本は二代目市川左団次が演じた時のものなので、こうなっている。鳴神の演者が自分の芸名を言うことで観客を喜ばせる技法で、歌舞伎ではしばしば見られるところ。

三　なかなか大した粋な奴らではないか。

四　目をくらましておいたのを。

五　諺に「禍いも三年たてば用に立つ」と言うのをもじったもの。弟子たちが隠して飲酒した禍いも、いまになってみると幸いになった。「三年酒」は前々年に醸造した酒で、酒精の強い上等な酒とされている。「禍も三年」を「三年酒」にかけ、次の五年酒と語呂を合わせて、「御念」を導いた技巧。

六　俗人の家。僧の立場から一般の家をいうことば。

絶間　ても巧者な事かな。

鳴神　サア、飲んでさしゃ。

絶間　さらばめでとう飲んで上げましょう。

鳴神　酌をいたそう。

（ト鳴神注ぐ。絶間受けて）

絶間　えゝ、もうわしゃたんとはいけませぬ。サア、これが二世までの盃じゃぞえ。

（ト絶間さす。鳴神いただいて）

鳴神　オット、、、。

絶間　こりゃどうじゃいの。

鳴神　酒一滴もならぬ。奈良漬けさえ嫌いじゃ。

絶間　サア、今までは下戸であろうけれどな、女房持たんすからは酒もあがったがよいわいな。

鳴神　でも、飲めぬものを。

絶間　わしが飲ましゃんせと言うに、飲ましゃんせぬか。

鳴神　飲もう。

絶間　いえ、おかしゃんせ。

七　うまいことをおっしゃる。

八　たくさんは飲めません。

九　二世までの固めの盃。「二世」は現世と来世。仏教で夫婦の契りは二世にわたるとするので、こういう。

一〇　酒の飲めない者。

鳴神　謝った、謝ったりというままに、注ぎくされ。
（ト一つずっと干して、顔をしかめる思い入れあり）
絶間　何とさんした。
鳴神　生まれて初めて酒を飲んだれば、腹の中が引っくり返る。おう、寒うなった。
絶間　今の間に熱うなるぞえ。
鳴神　サア、貴様へ戻そう。
絶間　ハテ、祝言に戻そうとは言わぬものじゃ。
鳴神　そんなら、返そう。
絶間　返そうとも言わぬものじゃ。
鳴神　そんなら、おう、納めさせられい。
絶間　コリャ、めでとう納めようわいなあ。
鳴神　イヤ、もうならぬ〳〵。
絶間　わしが言うこと聞かんせぬか。
鳴神　注ぎたまえ。
（トまた絶間注ぐ）
なんと、なみ〳〵と受けたであろう。

一　注いでくれ。いやいやながら、どうしようもなく、ええままよといった投げやりな気持をこめた表現。

絶間　見事じゃわいの。おう怖。
（ト飛び退く）
鳴神　何とした〳〵。何が怖い〳〵。
絶間　それ、盃のうちに蛇がいるわいの。
鳴神　いかい阿呆でござる。何もないものを。
絶間　それ、いるわいの。
鳴神　ハヽア、聞こえた。蛇じゃない。あれは注連縄じゃ。ソレ、見や。
絶間　ほんに注連じゃわ。
鳴神　おゝ、臆病な。
絶間　ありゃ何の注連じゃえ。
鳴神　ありゃ大事の注連で、雨が降らぬじゃて。
絶間　どうしてえ。
鳴神　大事なこっちゃ。人には話すまいぞ。大内殿に恨みがあって、世界の竜神をあの岩屋に祈り込んで、その上に密法[四]の注連を引いたが、今でも雨を降らそうと思えば、登って、引いた注連のまん中を切るじゃて。竜神が飛び去る。大雨車軸じゃて。大事のことじゃぞ。
絶間　あの注連のまん中を切りさえすれば、雨が降るかえ。さても不思議な

二　現行台本では「くちなわ」と読ませている。
三　わかった。
四　真言秘密の祈願法。

事の。サア、飲まんせ。

（ト注ぐ。この内のぞみあり）

鳴神　おっと北山桜、狂言の名題じゃ。サア、上げやしょう。

絶間　祝うて三献。いやならおかんせ。

鳴神　いやとは言いもいたしゃせぬに。

（トこの内、せりふ始終生酔いのこなし）

もうならぬ〳〵。

（ト言いつつ寝る）

絶間　おゝ〳〵、よう飲まんした。それでこそ、いとしい坊さんなれ。ほんに坊さん、じゃなかったこちの殿御、もし、これはならぬ。起きさんせ。サア、こそぐるぞえ〳〵。

（ト揺り起こし、あたりを見て思い入れあり）

えゝ、勿体なや怖ろしや、鳴神様、許して下さんせ。自らが心よりお前を堕したではござんせぬ。忝けなくも仰せを受けし身の役目、今酔いの中の教えのごとく、あの注連を切らば、竜神竜女は海底へ飛び去り、五穀成就の雨は忽ち（ト思い入れ）。

（ト注連縄をきっとにらみ、身づくろいして岩の上へ登る。この内震

一　このせりふのうち、よろしく思い入れあるべしという意。上人の行法を破る手段がわかり、絶間が決心をかためる重要な部分なので、とくに注記したのであろう。

二　「おっと来た」と言おうとして、それを『北山桜』と狂言の大名題にかけたおかしみ。『鳴神』のもとは『雷神不動北山桜』という一日の狂言の中の一場面であった。解説参照。

三　「祝って三杯」「献」は宴席で人に杯をさす時に数える語。

四　ウ用語集

五　堕落させる。

六　竜神は海底の竜宮に住むと考えられていた。

七　米・麦・黍・粟・豆を五穀という。穀物の豊作を約束する雨。

える思い入れさま〳〵あり。懐剣を取り）

まんまと済ました。南無諸天善神、皆竜王、雨を降らしてたび給え。南無帰命頂礼〳〵。

（ト太鼓、唄にて注連縄を切る。仕掛けにて女竜男竜天上する。大雷。舞台先へ本の雨おびただしく降る。この内絶間花道へ逃げて入る。所へ白雲坊、黒雲坊、玉襷、破れたる菅笠にて、同宿多勢、皆々法衣、玉襷、尻からげ、あるいは傘、菅笠、糸だてなど被り、あるいは耳をふさぎ、騒ぎながら花道より駆け出る）

皆々　師匠様〳〵。

（ト声々に呼び、鳴神を尋ねる。白雲坊、鳴神を見つける）

白雲坊　ヤアここじゃ〳〵。

（ト多勢して抱き起こす。この内、鳴神まっ赤になり、酒に酔い、他愛なき思い入れ）

白雲坊　ムゝ、臭い〳〵。

黒雲坊　酒蔵へ入ったような師匠様。

皆々　師匠様〳〵。

（ト鳴神少し目を覚まし、他愛なき体）

八　「仕済ました」が正しい。やり終わった、の意。

九　「南無」は敬い礼拝することを意味し、仏に帰依し、願いごとをする時の祈りのことば。「諸天善神」は天上界の善神たち。十二天。

一〇　「海竜王」の宛字だろう。竜神竜女の王。

一一　仏道に帰依し礼拝する唱え言。

一二　菅の葉で編んだ笠の破れたもの。

一三　同じ寺の僧侶たち。

一四　尻はしおり。

一五　縦を麻糸、横をわらで織ったむしろ。日よけ、雨よけなどに使った。

一六　正体がない。

白雲坊　これ鳴神様、行法が。

皆々　破れましたわいの。

黒雲坊　見れば密法の注連縄も引きちぎれて、竜神は天へ駈け落ち。

皆々　いたしましたわいの。

白雲坊　じゃによって、雨が。

皆々　降りますわいの。

黒雲坊　雷が。

皆々　鳴りますわいの。桑原〳〵。

（トこの内大雷、大雨。鳴神、思い入れ）

鳴神　なんだ、雨が降る。

白雲坊・皆々　こぼれますわいの。

鳴神　なんだ、雷が鳴る。

黒雲坊　あれ。

（トまた大きく鳴る。鳴神、思い入れあって）

鳴神　これ、なぜ雨が降る。なぜ雷が鳴るやい。

白雲坊　これ師の坊、こなたは最前の女に落とされさっしゃったぞや。

同宿一　逃げて往たあとで聞いたれば。

一　雷の難を避けるためのまじないのことば。

同宿二　雲の絶間と言うて、大内第一の官女。

同宿三　仰せによって、お前を落としに来たので。

皆々　ござるわいの。

鳴神　さては我が行法を破らんがために来たりしよな。ハア丶、その絶間を

（ト思い入れ）。

（トそれより荒れ立ち、舞台中を飛び回り捜す。皆々跡について回る。

のぞみあり。この内始終雷）

あゝら無念や。口惜しやな。寸善尺魔の障碍仏罰を蒙り、彼の密法の行破れしよな。よし、我破戒の上からは、生きながら鳴る雷となって、彼の女を追っ駈けんに、何条難き事あらん。東は奥州外ケ浜（ト思い入れ）。

〽西は鎮西鬼界ケ島。

南は熊野、那智の滝（ト思い入れ）。

〽北は越後の荒海まで。

二　宮廷。

三　天皇の仰せ。勅諚。

四　荒れはじめる。荒事の勇壮で激しい演技（いわゆる荒れ）になる。

五　前出。この間の演出に、格別のくふうをしてほしいという注記。

六　世の中には、善いことはごく僅かで、逆にさまたげやさわりは非常に多いというたとえ。

七　邪魔。さまたげ。

八　これ以下、東西南北の四方につき、日本の土地の果てを言い立てることは『矢の根』にもある。もと『曽我物語』から出た。厄払いの祭文の口調をとどめたものかと考えられている。

九　秋田県の能代平野から青森県の津軽半島を経て下北半島に至る一帯の海岸の名。古くから日本の東の果ての地として知られていた。

一〇　「鎮西」は九州。「鬼界ケ島」は鹿児島県大隅諸島の中の一島。薩南諸島の古称との説もある。これを西の果てとした。

一一　紀州和歌山県の熊野灘に面する南端一帯。日本の南の果てとして知られていた。

一二　新潟県の日本海沿岸。実際には北端ではないが、そう考えられていた。

人間の通わぬ所（ト思い入れ）。

〽千里も行け。

万里も飛べ。

〽いで追っ駈けんと鳴神は。

（トこれより）

〽跡を慕うて。

（ト大三重、大雷鳴、大雨、大どろ〳〵にて、投岩、投げ人形ののぞみあり。この模様[四]よろしく）

幕

一　下座音楽。三味線で演奏する三重の手を、強く大きく弾くもの。
二　下座音楽。古くは「幽霊太鼓」の称もあったように、本来妖怪変化や忍術使いの出入りに用いる鳴物であるが、ここは荒れの演技にふさわしい鳴神を悪霊として扱うので、大ドロドロを使ったのである。大太鼓を長ばちで烈しく打ち、怪奇的な雰囲気をかもし出す。
三　ほうり投げるためにこしらえた小道具の人形。
四　⇨用語集。